
春よ恋

歌宮 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春よ恋

【Nコード】

N2159S

【作者名】

歌宮 薫

【あらすじ】

文学青年と桜の精の恋のお話。

春風がさわり、と頭上の桜の枝を揺らした。

桜花は千朶万朶せんたまんたと咲き乱れ、薄紅の花びらを絶え間なく風に舞わせ
る。

音もなく踊る花弁は、はらはらと僕らの体に零ふったり、零らなかつ
たり。

僕らは一本の大木の下に座り込み、その太い幹に寄りかかった。
お互いの肩先をちよつと触れ合わせながら、僕は隣みはるにいる深春の小
さな手に自分のをそつと重ねる。

深春が嫌がる素振りも拒絶の言葉も示さないことにほつと胸を撫で
下ろし、安心した。

それから会話も無しに、ただそこに佇む。
町外れの小高い丘は、真正銘の無音だった。世界は二人だけ。そ
んな風に錯覚しても、許されるくらいに。

花吹雪の中、僕らは満ち足りて長閑な静謐に包まれる。

たゆたう時の流れに静座して、薄く目を閉じ長い睫の影を頬に落と
し、緩やかに胸を上下する深春の横顔は美しい。

見目形が余りにも人間らしく、何度も感じるがとても人外とは思え
ない。

その色白の肌も、伏せた目蓋の奥の透き通った黒の眼も、淡く紅潮
した両頬も、桜色の唇も、しなやかな四肢も、一種神聖さを漂わせ
ている。到底この姿からは禍々しい匂いのする妖怪には結び付かな
い。

「藤弥、さん」

隣から聞こえる、僕の名前。

深春の口唇がゆっくりと綻んだ。それからただ一言、雨のように細かい声を紡ぐ。「後悔は、していませんか」

後悔。

妖の類に属する深春と凡庸な人間の僕は恋仲である。背後に聳える桜の木の化身である深春は、本来なら人の眼には映らない。しかしどういつか彼女の姿は幼少の頃から自分には見えた。

出逢いから幾つもの春を重ねた僕は青年と呼ばれるまでに成長した。しかし深春の姿は一向に変わる気配を見せない。これからもずっとそうだ。桜の精である彼女は老いを覚えず、それが気がかりなのだろう。年を取り、紛れもない死を迎えるのは此方だけで、彼女は僕が消失した後もずっと此処に居る。

同じ時を刻むことは可能だが、それを永遠に出来るのはいつか紛れもない死を迎える僕のみ。深春にとって二人で紡いだあたたかな日常は一過性のものにすぎない、という事実が虚しい、もどかしい。しかしそれを言ったら心優しい彼女はきっと傷つく。抗いようもない自分の立場さえ恨むだろう。だから悠遠の秘密を呑込んで、僕は微笑みかける。

「どうして今頃になってそんなことを訊くのさ」

深春と晴れて思いが通じ合って、もう何度の春を終えただろう。この質問は余りにも今更過ぎた。

それに対し彼女は眉を下げ、少し困ったように笑った。「もうすぐ、逢えなくなりますが」嗚呼、そうだろうと思った。

僕らの逢瀬の時間は果てしなく短い。四季を通して、この桜の木が花を咲かす間だけしか合間見るのは許されない。これはずっとずっと

と昔からの、桜の化身である深春の定め。盛りを過ぎてしまえば、花の季節を待つ桜の木と一緒に僕は冬の向こうに連れ去られた彼女に恋い焦がれる。

逢えない日々の歯痒さや胸の痛みは、僕が深春と共にある為に覚悟した重い重い不文律。

今年ももうすぐ花は散る。

初夏の光を浴び眩しく煌めく青葉が群を成し枝を万緑に染め上げるのは、願うよりも近い時期になって来た。

三つの季節を終え、毎年桜の花便りを耳にすれば僕はこの逢引きの場所に訪れ、白昼夢のように曖昧模糊で朧な時の流れに深春と静かに身を委ねる。

そんな間柄を、彼女は疑問に思ったのだろうか。同じ人間と恋におちたら、もっと幸せになれたのでは。遠回しにそう訊ねているのだ。

「大丈夫。後悔なんて、一握りも抱えていない。僕は、春が巡れば何度でも深春に逢いに来るから」

明日のことは分からない。けれど、深春と出逢い、淀んだ世界の全てが透明になったのは確かだ。

彼女は示してくれた、世界の本当の姿を。

頭上の大空の幾つもの表情、小鳥が歌う恋の唄、蝶の翅に浮かぶ鮮やかな色彩、硬い蕾からいよいよ花開いた桜の息吹。生命の躍動を一つ一つ愛おしそうに教えてくれる度、見るもの全てが息づき、色づいた。なんて、輝かしいんだろう。深春の存在だけで、世界が極彩色に彩られた。

つまりは、深春と出会って新しい世界へと扉は開けたのだ。それを、

後悔だなんて。万に一つも有り得ない。最早愚問だ。

繋いだ手を離したくない、離れたくない。傍に、居たい。

今一番の最大級の自分の回答を伝えたくて、深春の掌に重ねていた自分の手を、きつく握る。その時の僕を、は、と息を止め目を見張り視線を釘付けにさせた、彼女のあどけない笑みを僕は一生忘れな

い。
春の麗らかな陽射しに照らされ、春愁を滲ませる彩色の瞳を細め、ほんのりと紅に色づいた花唇かしんが花開くように弧を描く、儂げな、雪解けとそれに伴う春の訪れを思わせる華やいだほほ笑みを。嗚呼やっぱり、何にも換え難いくらい僕は彼女が大好きだ。

「後どれくらい、逢えそうだい」

「もって七日でしょう」

桜の化身である深春は、己が後どれだけ現し世に姿を留められるのかが分かる。

残り一週間。

次の玉響たまゆいの春は、まだまだ遠い。

(後書き)

文芸部で書いた作品。

春めいた小説を作ろう！ と思い立って書きあげました。

感想・評価、ぜひお書き下さい。

これからの活動の参考にさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2159s/>

春よ恋

2011年10月8日23時44分発行